

# 薪屋ドットコム

## ニュースレター



■暖かい薪ストーブの焚き方  
《薪ストーブは焚き火とは違います！》  
勘違いしがちな薪ストーブの  
焚き方をご紹介します。

2010年1月15日  
(新月 16時12分)



こんにちは、館脇信  
王丸です。

お客様の薪ストーブ  
を拝見させていただく  
ことがたびたびありま  
す。上手に焚いてい  
らっしゃる方ももちろん沢山いらっしや  
います。中には薪ストーブの性能を発  
揮していない焚き方をしている方もお見  
受けします。

お客様に常に申し上げていること  
が、薪ストーブは本来、手間の掛から  
ない優れた暖房機器です。使うのに面倒な  
ことは一切無いのですが、勘違いした焚  
き方をすると暖かくありません。

そこで本号では、本格的な冬到来の前  
に、暖かくお得な焚き方をご紹介します。

まずは、焚き火と薪ストーブとの根本  
的な違いをご説明します。

## ■焚き火と薪ストーブとの根本的な違い——焚き火の場合

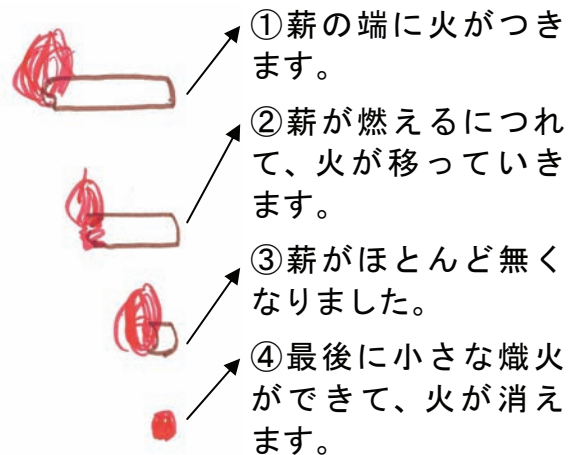
焚き火の燃え方は例えばこんな感じ  
です。



たき火

この焚き火の燃え方を説明すると、次

の通りです。



上図のように、薪の端っこに火がついて、だんだん燃えていきます。ちょうど、タバコの端にライターで火をつけて、少しずつ燃えていく、そんなイメージです。

ところが、薪ストーブ内で燃える薪はこれとは全く異なります。というか、薪ストーブは別の燃え方をするように設計されています。

もちろん、薪ストーブの中で焚き火と同じように燃やすこともできるのですが、ハッキリ言ってこの焚き方ではせっかくの薪ストーブ本来の暖かさは発揮されません。

それでは、どのように燃えるのか、燃やしたら良いかをご説明します。

## ■薪ストーブの燃え方

ところで、お使いの薪ストーブは分厚い  
鑄鉄（鉄板）または特殊な石、耐熱レンガ

で作られていると思います。こうしている理由の一つは、薪が燃える場所（火床）の温度を常に高温に保つために断熱するためです。

（前号でご紹介した、灰を取り過ぎないで、という理由の一つも断熱性を高めるためです）

断熱性を高めて、火床の温度を上げておく理由は、薪を効率良く燃やすためです。

薪ストーブ内では、下図のように焚き火とは異なった燃え方をします。



第1段階：  
高温状態で薪の揮発成分に火が付き、オレンジ色の炎が上が薪を包み込む。



第2段階：  
揮発成分が燃え尽きると炎がやみ、炭素成分が熾火（おきび）となる。

ストーブ内の薪は、上図のような2段階の燃え方をしているのです。

薪ストーブの中に薪を入れると、薪全体にボワッと火がつき、薪全体がオレンジの炎に包まれて燃えます。これが**第1段階**。

オレンジの炎が止むと、赤い熾火（おきび）になります。これが**第2段階**。そしてこの熾火が、薪ストーブの暖かさの秘密です。

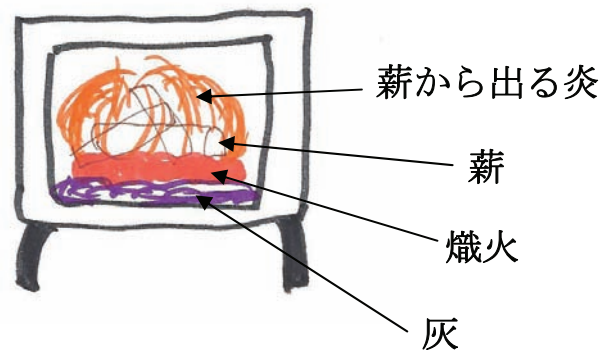
以上まとめると、薪ストーブ内の薪は、端から燃えていくのではありません。薪を入れると、

- ①全体にボワッと火がつき、炎が薪を包み込み、
- ②炎が止んだ時には熾火になっている。

そんな燃え方が良い燃やし方です。

熾火の上に薪を乗せると**ボワッ**と炎が上がります。炎が上がらなかつたら空気をに入れて必ず炎を上げてください。そうしな

いと、揮発成分が不完全燃焼のまま薪ストーブ内に充満します。



常に熾火があることで火床の温度を高温に保ち、薪全体を炎で包み込み、新しい熾火を作る。これが暖かい薪ストーブの燃やし方。

文書にするとややこしいですが、薪ストーブ内に熾火ができてしまえば、薪を入れるだけですから、面倒なことは何もありません。

## ■薪ストーブの焚き始めはどうするのか？

薪ストーブの性能を引き出すためには、火を点けたばかりの焚き始めは、熾火を早く作ることが大事になります。

コツは、**吸気と排気も全開にして炎を上げてオレンジの炎で薪を包み込むこと**。焚き始めは思い切って炎を上げて結構です。温度計があれば200～300度が目安（トッププレートでの温度）。

ひとしきりオレンジの炎を上げて薪を燃やします。炎が弱まった時には熾火（熾火）が出来ます。この熾火を、灰の上にとっぴりと作ること。これが目標です。

熾火ができてしまえば、あとは何の面倒もありません。薪を載せるだけで火がつきます。薪を入れたら必ず炎を上げてください。（空気を絞りすぎると炎が上がらない場合がありますので、空気を開けて炎を上げてください。）

暖かい薪ストーブの焚き方は以上となります。ご不明な点は遠慮無くお問い合わせください。

# 薪屋ドットコム

## ニュースレター



■暖かい薪ストーブの焚き方  
《薪ストーブは焚き火とは違います！》  
勘違いしがちな薪ストーブの  
焚き方をご紹介します。

2010年1月15日  
(新月 16時12分)



こんにちは、舘脇信  
王丸です。

お客様の薪ストーブ  
を拝見させていただく  
ことがたびたびありま  
す。上手に焚いてい  
らっしゃる方ももちろん沢山いらっしや  
います。中には薪ストーブの性能を発  
揮していない焚き方をしている方もお見  
受けします。

お客様に常に申し上げていること  
が、薪ストーブは本来、手間の掛から  
ない優れた暖房機器です。使うのに面倒な  
ことは一切無いのですが、勘違いした焚  
き方をすると暖かくありません。

そこで本号では、本格的な冬到来の前  
に、暖かくお得な焚き方をご紹介します。

まずは、焚き火と薪ストーブとの根本  
的な違いをご説明します。

## ■焚き火と薪ストーブとの根本的な違い——焚き火の場合

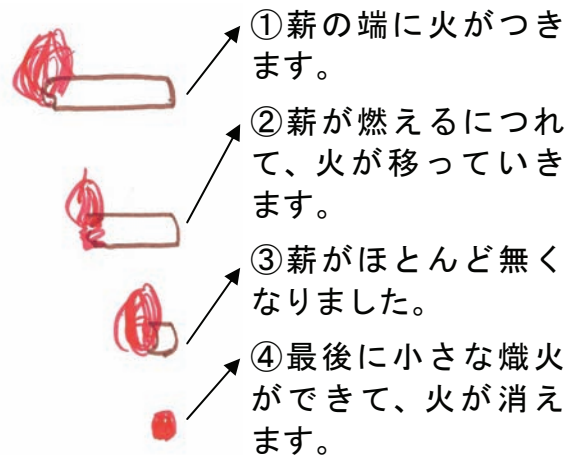
焚き火の燃え方は例えばこんな感じ  
です。



たき火

この焚き火の燃え方を説明すると、次

の通りです。



上図のように、薪の端っこに火がつい  
て、だんだん燃えていきます。ちょうど、  
タバコの端にライターで火をつけて、少  
ずつ燃えていく、そんなイメージです。

ところが、薪ストーブ内で燃える薪はこ  
れとは全く異なります。というか、薪ス  
トーブは別の燃え方をするように設計さ  
れています。

もちろん、薪ストーブの中で焚き火と同  
じように燃やすこともできるのですが、  
ハッキリ言ってこの焚き方ではせっかくの  
薪ストーブ本来の暖かさは発揮されませ  
ん。

それでは、どのように燃えるのか、燃や  
したら良いかをご説明します。

## ■薪ストーブの燃え方

ところで、お使いの薪ストーブは分厚い  
鑄鉄（鉄板）または特殊な石、耐熱レンガ

で作られていると思います。こうしている理由の一つは、薪が燃える場所（火床）の温度を常に高温に保つために断熱するためです。

（前号でご紹介した、灰を取り過ぎないで、という理由の一つも断熱性を高めるためです）

断熱性を高めて、火床の温度を上げておく理由は、薪を効率良く燃やすためです。

薪ストーブ内では、下図のように焚き火とは異なった燃え方をします。



第1段階：  
高温状態で薪の揮発成分に火が付き、オレンジ色の炎が上が薪を包み込む。



第2段階：  
揮発成分が燃え尽きると炎がやみ、炭素成分が熾火（おきび）となる。

ストーブ内の薪は、上図のような2段階の燃え方をしているのです。

薪ストーブの中に薪を入れると、薪全体にボワッと火がつき、薪全体がオレンジの炎に包まれて燃えます。これが**第1段階**。

オレンジの炎が止むと、赤い熾火（おきび）になります。これが**第2段階**。そしてこの熾火が、薪ストーブの暖かさの秘密です。

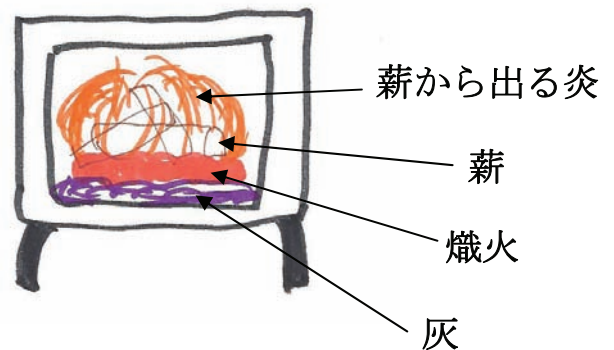
以上まとめると、薪ストーブ内の薪は、端から燃えていくのではありません。薪を入れると、

- ①全体にボワッと火がつき、炎が薪を包み込み、
- ②炎が止んだ時には熾火になっている。

そんな燃え方が良い燃やし方です。

熾火の上に薪を乗せると**ボワッ**と炎が上がります。炎が上がらなかつたら空気を入れて必ず炎を上げてください。そうしな

いと、揮発成分が不完全燃焼のまま薪ストーブ内に充満します。



常に熾火があることで火床の温度を高温に保ち、薪全体を炎で包み込み、新しい熾火を作る。これが暖かい薪ストーブの燃やし方。

文書にするとややこしいですが、薪ストーブ内に熾火ができてしまえば、薪を入れるだけですから、面倒なことは何もありません。

## ■薪ストーブの焚き始めはどうするのか？

薪ストーブの性能を引き出すためには、火を点けたばかりの焚き始めは、熾火を早く作ることが大事になります。

コツは、**吸気と排気も全開にして炎を上げてオレンジの炎で薪を包み込むこと**。焚き始めは思い切って炎を上げて結構です。温度計があれば200～300度が目安（トッププレートでの温度）。

ひとしきりオレンジの炎を上げて薪を燃やします。炎が弱まった時には熾火（熾火）が出来ます。この熾火を、灰の上にとっぴりと作ること。これが目標です。

熾火ができてしまえば、あとは何の面倒もありません。薪を載せるだけで火がつきます。薪を入れたら必ず炎を上げてください。（空気を絞ると炎が上がらない場合がありますので、空気を開けて炎を上げてください。）

暖かい薪ストーブの焚き方は以上となります。ご不明な点は遠慮無くお問い合わせください。